

稲作管理特報

平成31年4月5日
 入善産米品質向上対策本部
 黒東地域農業技術者協議会

品質の高い「みな穂産米」づくりは、まず「土づくり」から始まります。

堆きゅう肥などの有機質資材の散布とケイ酸質資材による土づくりを必ず行いましょう。

また、育苗に当たっては十分な浸種期間を確保するとともに、温度管理と搬出後の換気を徹底し、活力の高い苗に仕上げましょう。

1 土づくり ～不足している土壌の成分を補給する～

ポイント1 堆きゅう肥による有機物の散布

- ・有機物を積極的に施用し、土壌の腐植分や保肥力を高めましょう。
- ・堆肥や発酵鶏ふんは、近年不足している「カリ」の補給にも効果があります。

○牛ふん堆肥(1t/10a)または発酵鶏ふん(春施用 75kg/10a)

有機物施用の効果

腐植の含量が高まると、土壌の透水性や保水性、通気性が良くなり、養分の保持力が高まるとともに、微生物の増加が促され、地力が向上します。

ポイント2 ケイ酸質資材の施用

- ・土壌pHの改善とケイ酸分の補給のため、継続して施用することが大切です。

※主なケイ酸質資材

資材名	効果	施用量 (kg/10a)
珪酸石灰	・稲が倒伏しにくくなり、いもち病などに抵抗が増す ・土壌pHの矯正	160
アサヒニューテツ	・根腐れを防止し、根の活力を高める	160
シリカパンチF	・いもち病やごま葉枯病に対し抵抗力を増す ・土壌pHの矯正	120

ケイ酸質資材の効果

土壌のpHを高め、作物の養分吸収を高めます。ケイ酸がイネの葉や茎に運ばれて光合成能力を高めるとともに、割粃を軽減し、病気や倒伏に強くなります。

みな穂の米づくりは、まず「土づくり」から始めよう！

2 育苗管理のポイント ～温度管理に注意するとともに、換気を徹底する～

- ・浸種袋の色分けやラベル付けにより、品種の区分管理を徹底しましょう。
- ・去年の「うるち品種」は休眠が深いことから、十分に浸種期間を確保しましょう（浸種期間の目安：7～10日程度）。
- ・浸種時の水温は10～15℃を保ちましょう（特に浸種初日は12℃以上を確保する）。
- ・浸種始めは2～3日程度、水は交換しないでください。
- ・催芽及び出芽時に「育苗器」を使用する場合、温度は30℃を厳守する。
- ・育苗ハウス内の温度は25℃を超えないよう、搬出直後から換気を行う。ただし、夜温が10℃以下になると予想される場合はハウスを早めに閉める。

3 耕起・代かき ～根張りを良好にするとともに、除草剤の効果を高める～

- ・耕起は作業速度を落とすとともに、ロータリの回転も低速（PTO1速）にして、ていねいに作業を行う。
- ・代かきは浅水にして稲わらをしっかりすき込むとともに、ほ場の均平に努める。
- ・代かきは田植えの2～4日前に行う。
- ・代かき後の濁り水は、ほ場外に流さない。また畦畔沿いに吹き寄せられたワラなどの浮遊物は除去しましょう。

※代かき時に、水田から基肥一発肥料などの被覆殻が流出しないように注意する

4 苗箱施薬剤の散布 ～除草剤と間違えないよう、散布前に確認する～

- ・田植え3日前～田植え当日に、薬剤を均一に散布（1箱当たり50gを厳守）。

「コシヒカリ」	ルーチントレス箱粒剤
早生品種（「てんたかく」） 晩生品種（「てんこもり」、「新大正糯」）	エバーゴルワイド箱粒剤
「コシヒカリ」（※紋枯病の多発地域のみ）	

- ・「富富富」は、上記の薬剤を使用しないでください（後日発行する「富富富」特報でご案内します）。
- ・散布後は苗に付いた薬剤を払い落とし、軽く水をかける。
- ・育苗後に育苗ハウスで野菜を栽培する場合、ハウス内での散布は行わない。

© みら一れTVで、農業情報番組「あぐりアイ新川」放送中！（13:55、23:55）